

討論

司会（寺崎裕志）：それでは、ただいまより、パネルディスカッションの方に入らせていただきます。

午前中、先生方からの御質問、たくさんございました。それで、今から4人の講師の先生方にいろいろと御意見等を言っていただくんですが、皆様の方からの御質問等にお答えしていただくような形で御意見もお話ししていただくかと思えます。

そこで、大まかに分けたんですが、シヨプラー先生には、重度の子どもたちの指導についてお話ししていただくかと思えます。特に、御質問の中にあっただのは、非常に認知機能、表象機能の低い自閉症の子どもたちに、どうやって視覚的な手がかりを理解していったらいいのだろうかという御質問が一つございました。それから、パニックについて、午前中も御質問が出ておりました。他傷行動の子どもたちのことについても出ておりましたが、パニックについては、3人の方から御質問がございまして、パニックについてどういうふうに理解したらいいのか。パニックというのは、あってもいいのかということで、それと、もしパニックになったときの対処法について教えていただければということなんです。対処法というのは、事前にいろいろ子どもたちの理解をするということではなくて、いざパニックになったときに、どういうふうにしたらいいのかというような御質問です。それに関しまして、ストレスの解消の仕方、何かプログラムのようなものがあるのかどうなのかというような御質問がございました。

それから、エッケンルード先生には、学校の1日の流れ、スケジュールとか、グループの活動があるのかどうなのか。また、ワークシステムの中

で、作業的なものばかり多いのではないかと。ほかには、何かないのかというような御質問です。確かに、教科学習等もしておりますので、そのあたりも学校のお話をさせていただきたいと思えます。そして、一緒にIEPを作成されるときに、どういう点に気をつけられているか。また、そのIEPの目標を次の目標に設定するとき、どういうところで次の目標を設定するのかということ。

それから偏食についてなんですが、これはシヨプラー先生、佐々木先生にも一緒に御質問だったんですが、偏食の指導は、どういうふうにしたらいいのか。それから、石とか、いろいろなものを食べる異食行動ですね。それについていい指導方法がありましたら教えてくださいということで、これにつきましてもエッケンルード先生の方から、何か指導法がございましたらお願いしたいと思えます。

それから、佐々木先生には、心の理論と発達障害の関係についてということで質問がございました。佐々木先生の中に心の理論ということが載っていたということですので、それについて、もう少し具体的にお話をさせていただきたいということでした。それにつけ加えて、心の交流についての質問もございました。

それから、有澤先生に関しましては、日本における個別の指導について、もう少し詳しくお話ししていただきたいということと、日本でのTEACCHというのは、非常に難しいのではなからうか。今の体制の中では非常に難しいのではなからうかというような御質問で、じゃあ、これから日本の中ではどうしたらいいのかということ。これにつきましては、佐々木先生にも御助言いただければというふうに思えます。

今の質問を加えまして、先生方にお話をしてい

ただきまして、それぞれのお立場から御意見を
つけ加えていただければというふうに考えておりま
す。それでは、最初に佐々木先生の方から、よろ
しいでしょうか。○佐々木 私に与えられたテー
マは、偏食がまずございます。自閉症の人は、先
ほどからお話ししましたように、私たちと違うと
いうところはたくさんあるけれども劣っているこ
とではない。違うということがありますね。それ
で、この違いは何かというと、知覚や、味覚を含
めて知覚が違うんですね。それから、日本で行わ
れた一つの研究であります、ある新しい薬が開
発されて、成果があるかもしれないというふう
に思われたときに、アミノ酸ですね、ある神経情
報伝達物質、ニューロトランスミッターと言われる、
その材料になるアミノ酸があります。フェネラ
ニンとか、そういうものを経口投与をしますと、
血中濃度は普通の人のように上がらないんです。
それは、自閉症の人は、消化吸収ということも含
めて、かなり多くの人が我々とは体質を異にする
ところがあるというふうなこともわかりました。

アミノ酸は、御存じのように、たんぱく質の合
成成分で、一般に自閉症の人は、たんぱく質は好
きですね、食べるのに、お肉とか。多分、せっか
く摂取しても、取り込まれ方が非常に弱いとい
うふうなことがあるために、もしかしたらたくさん
食べるのかもしれないし、好むのかもしれないん
です。でも、それはわかりません。けれども、血
中濃度を、非常に人体に害を与えることが非常に
少ないと言われる放射性同位元素でラベリングし
て経口投与をしますと、血中濃度が上がっていく
速度がいろいろな人であるわけですが、日本の神
経科学者が、バイオケミストたちがやってみた結
果では、非常に血中濃度が上がるのが弱い。要す
るに、消化管からの吸収が弱いということであり
ます。これは、かなりの自閉症の人にかなり共通
した特徴だったそうであります。ですから、私た
ちの感覚で、これは偏食だとかどうだとかとい
うふうなことを一方的にやるのが、どんなに自閉

症の人を苦しめるかということもあるんです。食
べたものが、私たちとは違った消化吸收の仕方
をされている部分もあるんです。わからないところ
もまだまだありますけれどもね。理解できるこ
ろもありますけれども。

自閉症の人から見れば、こっちが偏食かもしれ
ないのであります。もしかしたらですよ。どのぐ
らいどうかということは、お互いの立場があるわ
けでしょう。だから、何でも我々の基準を基準と
して与えるというのはいけなくて、私は基本的
には、ほかの先生方がどうお考えになるかわかり
ませんが、成長や、体の成長と言っているか
ね、栄養障害を起こしていないし、体も丈夫で病
気もしないし、身体的に健康であつたら、それは
何を食べていたって偏食ではないのではないでし
ょうか。いろいろなものを何でもよく食べるけ
れども、始終病気をしているという人よりは、私
はよっぽどいいと思います。自閉症の人は、あ
んまり病気をしないでしょ。学校を休みますか。
例えばあります。インフルエンザも、むしろ自
閉症の人はかかりにくいのではないでし
ょうか。

というふうなことを含めまして、基本的には偏
食を私は無理に直そうとはしない。私は基本的
にしません。自閉症の人にとって楽しみは、私
は、我々の文化の中で生きていくための楽しみ
は少ないと思いますからね、基本的には。食事
の時間まで苦痛を与えるということは嫌です
から、できるだけ彼らが好きなものを用意し
ようというふうな心がけはしてもいいと思
います。彼らが好きになれるものを少し
でも工夫して献立に用意しようとする努力
は、いろいろなところでしましようとい
うことを、学校でも、保育園でも、いろ
いろなところでお話しますけれども、我
々が一般に標準として食べるものを、そ
の方法で食べなくてはいけないという
ふうにはしません。仮に、偏食がひど
過ぎて、健康を明らかに害しているとい
うふうな、あるいは成長をはっきり損
なっているというふうな兆候が見え
れば、それは別ですが、私は

そういう人に出会ったことはないんです、今まで。ですから、基本的には偏食を矯正をしようというふうにしないで、待っているということが多いです。だんだんに我々の食事の好みに近づいてくる人が私は多いと思っておりますが、皆さんと少し議論ができればと思いますね。

それから異食、パイカと言いますね。食べ物でないものを食べる。雑草を食べるとか、石を食べるとか、消しゴムを食べるとか、粘土を食べるとか。極端な場合には、自分の髪の毛を引き抜いて、それを食べているというふうなことをする人なんかも会いました。でも、これは偏食とかそういうものとは、およそ私は違うように思いました。今まで私は、かなり強い異食を示す人を3人ほどすぐに頭に思い浮かびます。これは私は、一種のパニックの状態に近いほどの混乱の状態にこの人たちはあったなということを思い出しますし、はっきりそう思える人もいます。

ですから、何ていうんでしょう、テンプログランディンさんも言っていましたけれども、自傷行動をしているときの自分というものは、痛みを感じないんだそうです。それはただ、その背景にある不安と興奮が強い、大き過ぎるからということでありまして、ある種の不安や興奮を和らげようとする行為でもあるんですね。自傷行動の場合。どうも、異食と言われるほどひどいものを口に入れて飲み込んでしまったりなんかするようときには、慢性的なパニック。パニックというのは普通は急性に訪れるものですが、慢性的な一種のパニック状態みたいなものを、ということは、それほどの不応状態にあるということを私は思います。自分の経験では、3人ほどの人に対してそのように思います。

それで、これはエリック・ショブラー教授への質問だということだったんですが、パニックの理解をということではありますが、これは、異食に関連して一言お話をと思っておりますが、パニックということは、だれにでもあり得るわけですね。皆さん

にも、私にもあります。自分の過去の経験や知識や技術では理解できない、あるいは解決できない、あるいは脱出できないような急激な危機が迫ったときに、だれでも感じるものだと思います。タイタニックに乗り合わせたらいかがでしょう。神戸でありました震災の真ただ中にいたらどうだったでしょう。だれでもなるんですよ、パニックというのは。自分のこれまでの知識や経験、技術では理解もできないことが起きた。あるいは、そのことを解決もできない、あるいは脱出することが当然できないというふうな状況に置かれたら、だれもがパニックになりますね。

ところが、私たちにはそういうことがめったに起きないというのは、かなりのことは理解ができるからですね。ところが、自閉症の人は、私たちから見るとなぜこんなことがというところが私たちのように理解できていないわけです。私たちのように感じ取れない。ですから、私は簡単にパニックになるように見えるわけです。だけど、自閉症の人のことをこちらがよく理解して、その人に了解できないような、理解できないような状況を与えなければ、この人たちはパニックにならないんですよ。これは、きのうからお話ししたとおりであります。

きのう、私がちょっとしたお話をする前にこの御質問をお出しになったのなら自然なことですが、あの後にこの御質問をお書きになったのでしたら、どうしてこの方は御理解なさらないかと私は思います。どうしたら理解していただけるかなと、この人に、というふうに思いますが、多分、その前にもう既にお書きになったのだらうと、こういうふうに思うんですね。パニックというのは、だれもが起こすことですよ。そういうふうに私は思いました。後でエリック・ショブラー先生がどうおっしゃるか。

心の理論についての御説明です。心の理論というのは、相手が何を考えているか、相手が何を信じているか、そういうことが理解できないときに、

そのことを理解できるできないということに関する一つの理論ですよね。相手の信念を了解するという。自閉症の人には、非常に苦手な領域です。簡単に言えば、この人たちは、視覚的に情報をとらえる力が強いということは、視覚的に確認できないことをとらえる力が弱いと、こういうわけがあります。そうすると、相手の考えていること、相手の信念、それは目で確認できないわけですよね。ですから、そこがわかりにくいわけですね。あるいは、そのことに対して共感できないわけです。

具体的に英国の人たちが、ここの理論の研究は、セオリー・オブ・マインドといいますね。TOMと言います。その研究は一生懸命なさっていて、自閉症の人にとっても発達しにくい領域だということをよく言われます。アメリカにこういう遊びがあるかどうか、鬼ごっこという遊びを日本の人はしますね。あるいは、隠れんぼでもいいです。そうしたときに、自閉症の人は、恐らくめったに参加できないんです、本当の意味では。なぜ参加できないかということ、鬼になることの意味というのがわからないんですね。ある瞬間から、ある人にタッチされたその瞬間から、自分には鬼という役割の意味がついて回る。鬼ということに関して、みんながどういう共通理解をしているか。鬼になることを、どんなにみんなが嫌がっていることなのかということがよくわからないですから、鬼であろうとなかろうと、あんまり気分の変化がないのであります。自閉症の人は。ですから、鬼であることをやめようと余りしないし、鬼にされることを何とか逃れようとする努力をしないわけですね。というのは、鬼の意味がよくわからない。鬼にどういう役割がくっついているかというようなことがわかりませんから。ですから、視覚的に確認できるトランプゲームとか、ジグソーパズルとか、日本では神経衰弱なんて言われるトランプの神経衰弱になりそうなゲームがありますが、ああいうことはよくできるけれども、鬼ごっこ、隠れんぼができない。そのできなさということの裏に

は、セオリー・オブ・マインド、心の理論の発達が悪いと、こういうふうに言われる部分があるんです。おわかりいただけでしょうか。どういう実験をして、どういうふうな確認をしてこういうことを言ったというようなことはありますが、時間を私だけで使ってしまうのはいけないでしょうから。

そういうことは、発達障害の人すべてが持っているわけではなくて、例えばダウン症候群の人たちは、心の理論の発達はいいです。自分がこうすると相手はどう感じるかということをいろいろなレベルで感じます。だから、相手が喜ぶことをしようとしますし、相手が悲しむことは、自閉症の人よりはずっとしないでおこうというふうにします。こうするとお母さんが喜んでくれるから、こうするとお父さんが喜んでくれるから。ですから、子どもにたくさんのかんがいを強要し、期待をする育児をされ過ぎると燃え尽きるんですね。バーンアウトをするということがありますね、ダウン症候群の人は。自閉症の人は、そういう意味での燃え尽きというのは、めったにしません。絶対という意味ではありませんが、非常にしにくいということがありますね。

ですから、発達障害の人が、みんな心の理論の発達が悪いというわけではないんです。かなり自閉症、自閉症連続体、オーティズム・スペクトラム・ディスオーダーと言われる人たちに、いろいろな程度に共通している問題ですね。発達しにくい領域ということをお理解いただければと思います。

それから、同時に心の理論と関連づけてかもしれません、心の交流ということについてどう感じますかと、こういうお話がありました。私たちは、心を通わせているつもりで接していることがあります、自閉症の人に。本当に通っているかどうかということが大変難しいことがあります。通わないというわけではありませんが。相手を大切にすると、相手の気持ちを尊重するというふうな気持ち

を持っていろいろ接することによって、心は通い合っているというふうに思っておりますが、私は、でも TEACCH の人たちと接するようになって、意味を交換し合う、あるいははっきり意思を交換し合う。意思を交換し合う、意味を交換し合うということをしっかりする方が、はるかに心は交流するように思います。心の交流はいいように思います。

恐らく、お互いに自分の意思をしっかり確認して交換し合える状況をつくる方が心が交流するんですけども、そういう方法を持ち得なかったときには、何となくとにかく優しく接触して、相手をできるだけ受け入れている気分で時間を共有し合うと心は通い合っているからというふうに我々セラピストは思うしかなかったと。私が一緒に小児療育相談センターで働いたサイコロジストの人も、二十何年も前には本当に言っていました。自分たちには、優しさしかサービスをするものがないと、自閉症の人には。笑顔しか差し上げられないと。これは本当に正直な気持ちで率直な人たちだと思いました。優しくする以外に、サービスがこの人たちに提供できないじゃないかと、そういう時代がありましたですね。けれども、本当は私たちはこう思っているんですよということを相手に伝えてあげる。あなたが思っていることを、こうすれば私たちは理解できますよということを教えてあげるといことの方が、本当は、心の交流がよくなるように思います。TEACCH へ行ってみると、ノースカロライナへ行ってみますと、改めてそういうことをしっかり教えられるように私は思えるんですね。

それから、TEACCH プログラムを日本で実行していくには、今の体制では困難だとおっしゃったと。今のどの体制を、先生の学校教育のトレーニングの体制で困難だとおっしゃったのですか。どういうところで困難だとおっしゃったのでありましようか。

例えば今、私は岡山県の倉敷市の大学に週に3

日行くようになりました。大勢の人が周辺に集まってきてくださいます。お母さんたちを中心にしたサービスを月に1回、2時間余り大学でやっています。そうすると、TEACCH の小さなモデルを家庭でいろいろとおやりになってみるわけです、生活のモデルを。きょうは、こういう来客がありますというようなことを、その人の写真があれば、ホワイトボードを用意されて、そこへマグネットで張っておく。きょうは特別、ここへ買い物へ行きますというようなことを張っておいてあげるとか、平素やらないことを、きょうはあるというようなことを前もって予告しておいてあげるとか、過ごしやすいかです。短い言葉に、ピクチャー・ディクショナリーという、絵による補足事項をつけながら、この子とコミュニケーションをすると、どんなに生活がしやすくなるかというようなことは、大勢の方が言っておられます。人が人を呼んで、実に60人も70人も、お母さんが毎月、あの小さな町の方が集まっておいでになるくらいで、こうすると、こんなにこの子と一緒に日常生活がしやすくなりますよということを次々にお母さんたちが確認していかれるわけでありませう。それは TEACCH モデルの小さな応用であります。

それから、岡山県には誕生寺養護学校という学校があります。一度お話しに行きました。そうしましたら、先生たちは大きく感動してくださいました。実際に、どこの学校でこういうプログラムを豊かに実践していますかと言われましたので、私はいくつかの学校といくつかのクラスと、それからいくつかの施設を紹介しました。先生たちは手分けをして、そういうところを見学し、研修にいらっしやうと、そして今、一生懸命取り組もうとしていらっしやうと。多分、今の体制でも、かなりのレベルまで、その学校は実行されるだろうと思われまうし、もう成果を確認されつつあるわけでありませう、どこが困難なのでしょうかと

うことですね。

横浜市の親の会の人たちは、すぐこの近くに、ヒガシマ工房という通所更生施設をおつくりになって、大きな成果をお上げになりました。横浜市はそのことを確認してくださいました。TEACCHモデルであります。一番最初に勤めた20人ぐらいのスタッフの人は、全員、ノースカロライナに1週間ずつ勉強に行かれたのです。多少ぜいたくなことをしたというふうには思います。でも、そのぐらいのぜいたくは、十分価値があったというふうに横浜市もおっしゃっているわけでありまして。成果が上がりました。スタッフも驚きましたけれども、そこへ御自身の青年を通わせていらっしゃる御家族もやはり驚かれました、基本的には。成果が確認されて、入所更生施設をつくりました。定員40人で小グループ制にしてあります。私は、入ってこられるときに、一度に40人もの人が入ってこられたら混乱するから、10人ずつぐらい、何回かに分けてお招きしたらいいと、こう言いましたが、彼らは平気ですと言われました。大変な、大層な自信だと思いました。密かに遠目で心配していましたが、何も混乱は起きませんでした。いい施設をつくってくださったです、確かに。設計も何も。みんなに個室があって、小集団でグルーピングができ、自分の部屋に帰ることもできて。全体では40人ですけれども、数人ずつが家族的に住むような雰囲気になり、個室があって。珍しく、東京都の建築のフェスティバルで、福祉施設としては初めて特別賞を取った、入賞したという、見事な設計と、見事なものだと私は思います。でもそれは、TEACCHモデルというものを取り入れた通所施設のときに成功したことが横浜市に信頼を得た。ですから横浜市は、そういう施設を、入所施設をつくってくださった、次に。スタッフが望むようにつくってくれたと基本的には思います。

だけど、どの人を入所者として選ぶかということについては、横浜市の方に選ばせてほしいと。

困っていらっしゃる方から入れるからと。その人たちを、実に40人一度に入れたんです。実際には、38人の人でありました。2人の人が次の週にお出でになりました。御家族の事情があつて。でも、混乱しませんですよ、それは。

そのように、こちらが自閉症の人のことをよく知って、そういう環境を整えて待つてさえいれば、その人たちは大きな混乱も何も起こすことがないわけです。これだって TEACCH の応用じゃないですか。現体制では困難というのは、どこのところを困難とおっしゃいましょうか。彼らは、まちで…。

○司会(寺崎) 先生、申しわけございません。困難というのは、チームで評価、診断してプログラムを立てていくと、チームで。そういうことなのですが。今の学校では、ちょっと難しいんじゃないかということなのですが。

○佐々木 そうですか。わかりました。それじゃ、こういうお答えの仕方ではだめですね。

○司会(寺崎) いや、それも結構なんです。その実践の中で、可能な限り手がかりがありましたらということでしたので。

○佐々木 そうですか。わかりました。それで、地域社会での生活も含めて、彼らはいろいろなレベルに合ったところへ就労に行きますし、就職をしますし、日常の例えばファーストフードの利用の仕方なんかも、どんどん自分でやっていくようになります。言葉のない人は、書いてもらったものを、この人の意思を代弁したものを書いてあげるわけでありましてね。日本流に言いますと、例えば「このハンバーガーを下さい」と、こういうふうに自分で言えないんですね。そうすると、それを書いたものをあげるわけです。普通、私たちが行きますと、マクドナルドのスタッフの人は、トレーニングを受けていて、「お召し上がりですか、お持ち帰りですか」ということを聞きます。そういうことを聞かれちゃ困るんであります、自閉症の人は。うまく答えられないから。だから、必ず

最初に「持ち帰ります」と、もう書いておいてあげるわけです。相手が聞きそうなことを全部書いておいてあげるんです。「お飲み物はいかがですか」と必ず聞きます。ですから、最初に「オレンジジュースを下さい。これですべてですから、何もお尋ねにならないください」と。そういうふうに書いておいてあげて、1回、2回、練習をしますと、実に安定して利用できるわけでありました。自分でいろいろなことを言える人には、そんなことを書く必要はありませんですよ。ですから、その人のレベルに合わせて、そこでの適応行動を援助する。しかも、相手のお店にもお願いしておくわけでありまして、そういうことを。こういうものを持って我々のところから青年が行きますからお願いしますという。それで、その自閉症の青年には、どこでもこういうことが通用するんじゃないかと、あそこのお店なんだということを教えておく。そういうものをだんだんふやしていくわけですよね、次々に。そして、そのうちには、そういうものがなくて、自分で表現できるようになった人には、そんなものは使いません。だけど、私たちがいろいろな国々を旅行するときに、小旅行するときにも、カンパセーションブックを持っていくでしょう、ハンドブックを。こういうときにこういうものを片言で言おうとかね、いうふうにして行くのではありませんか。あるいは、あそこのお店は、日本語のわかる人がいてくれる店だというふうに、わかってそこの店を選んで行くとかというふうにする。それと同じことをやるわけです。こんなふうに御理解いただくと、TEACCHは、TEACCHがノースカロライナでやっているような診断評価のプロセスを、TEACCHセンターを中心にやって、そして学校に広げていって、TEACCHセンターからそれぞれの場にコンサルタントがコンサルテーションに出かけていくというふうなシステムを全体的に今することはできないかもしれません。今すぐにはですね。そういうモデルができつつあるところはありますけど

も、いきなりそれはできないだろうというふうに思います。その一つの理由は、日本流に言いますと、乳幼児健診は例えば厚生省の管轄で保健所でね。保育園は厚生省で、幼稚園は文部省で、学校が文部省で、卒業後の就労に関するさまざまな問題は労働省でというふうな感覚で、ぶつぶつ切れておりますから難しい。TEACCHはそれをTEACCHとして、TEACCHモデルとして幼児期から恐らく老年期まで、一貫したシステムの中で行われるという大きな利点があるだろうというふうに思いますですね。これは恐らくそれぞれの国によってそれぞれの国の便利な、文化に合わせて便利なように応用法を考えていかなければいけないうふうなふうに思います。ノースカロライナほどTEACCHをですね、そういう意味では部局を超えて、部局際的にですね、一つのコンプリヘンシブな、トータルな、しかもフォーマルなプログラムとして承認されているものは、なかなか世界にはないと思いますが。でも、いくつかの国は国を挙げてTEACCHを導入するようになっておりますから、そういう国はできるんだらうと、確かに思います。ですから、日本は日本の文化に合わせた応用の仕方をしていかなければならないと、これは現実かと思えます。大体私に御質問いただいたことはお答えしたつもりでおりますが。○司会(寺崎) はい、ありがとうございます。それではエッケンロード先生に、学校の1日の流れ、つまりスケジュールとかグループ活動とか、そういうことに対しての御質問、それからIEPを作成されるときに、保護者との意見が一致しにくいことはなかっただらうか。もし一致しなかったらどういうふうにされますかということ。それから席に着いて学習をするにはどういうふうにされたら席に着いて学習するようになったかというようなこと。それから先生の個人的なことなんです、先生が先生になられたきっかけとか、TEACCHとの出会いとか、そういうところもお聞きしたいというアンケートがございました。そ

れと、昨日の講演の中で、移行期等、14歳ごろというお話があったというようにあるんですが、14歳ごろというのは一般的には思春期と思われませんが、何か関係あるのかというような御質問もございました。それとIEPに関してなんですが、昨日資料で配られましたA君ですね。アレックス君なんですが、アレキサンダー君の事例について、通常の学級、普通学級との交流をどういうふうにしているのか。それから特に抜き出して学習の場を設けることについての評価等について教えていただきたいと。昨日の資料だと思います。そういうことについてお願いいたします。

○エッケンロード まず最初に学校での1日の一般的な流れということから話をしたいと思います。センターにおいて子どもを教えておりますので、大体30分の単位で繰り返されます。まず、子どもたちは学校に来るわけですが、登校、通学して、そして9時ごろには学校に参ります。そして30分ほど大体朝食を食べる手伝いをしたり、あるいはトイレ、そういった関連のこと、そして子どもによってはバスで2時間ぐらい揺られて来る子もいますので、1日のための準備、そういうものを最初に行います。それから9時半から10時まで、これが午前中のグループ活動の時間でありまして、その時間帯においては、例えばこの日、あるいはこの月、この年のこの月のこの日に何をするかということ話し合います。これはすべて視覚的に行われて、あるいはこういう特殊学級に行くんだということを学んだりします。そしてまたその日の昼食に関して絵で見せて、その絵について、どの昼食を食べるかということを選んでもらったりします。あるいは歌を楽しむ、歌を歌ってそれを楽しむ時間もあります。そしてまた毎月ある一定のその時間帯には、スタディーをする時間がありまして、そのスタディーの時間帯においては、ストーリーを教えたり、あるいはゲームによって単語を学んだりします。ただ、ここで1点指摘しておく必要があると思いますのは、たとえ

グループの時間であっても、やはりその子ども一人ひとりの個別のスタイルがあるということですね。すなわち非言語的な形での理解が必要な子どもに対してはそう行うようにいたします。すなわち絵とかを見せたりしますし、あるいは何かコミュニケーションのために何かエレクトロニック的な電子的な装置が必要な場合には、そういったものも使う。あるいは言葉で理解する子どもの場合には言葉を使ったりするという、いろいろなスタイルがそれぞれ子ども子どもで違います。10時から10時半が最初のワークセッションです。そして6人の子どもに対して2人のティーチャーがいます。そしてその2人の先生一人ひとりに、そこにつく、専任でつく1人の子どもがいて、そしてきのうお見せしましたように、3人は一緒になってそのセンターでやると。そしてもう一人はコンピュータに取り組むという形になります。1対1で教える場におきましては、ある特定のスキルを、きのうお見せしたようなプロジェクトという形で教えていく。あるいはもう少し高学年になりますと、実際勉強の内容を教える場にもなります。先ほどのワークシステムの質問にも関連しますので、ここで答えたいと思いますが、1対1の教える場においては、その何らかの技能をあるいはスキルを教えていく。それに対してその子どもがマスターしていくと、今度は自立して独自のワークボックスに行ってそれができるわけです。ですから例えば何かをまとめる、パッケージ化する、あるいは組み立てる、あるいは本を読む、何かをつくる。そういうことですね。ワークセッションは10時から10時半と申し上げましたが、実際のワークは、作業は20分から25分ぐらいで、そしてその後5分ぐらいの休憩があって、自分が、子どもが遊ぶおもちゃを選んだり、あるいはそういう自由時間になるわけです。私の学校におきましては、実際にそういうスペシャルクラスに行く時間がございますので、みんなでこのグループとして行って、そのスペシャルクラスに参加し

ます。それは例えば音楽とか体育とかダンスとかドラマとか、あるいは図書館に行く。そういう科目の時間がありますけれども、それが10時半から30分間、11時まで行われます。そして戻ってきまして、そこに行ってから戻ってきまして、そして子どもが食べるものの準備をして、そのおやつを食べた後、今度は2回目のワークセッションがあるわけですが、それは最初の1回目のワークセッションと同じような形態。しかし先生が1対1でやる対象の子どもは、また違う子どもですね。その後にもまた3回目のワークセッションがあります。こういう形で必ず1日の間にみんな子ども一人ひとりが必ず先生からの1対1の時間を持てるようにしているわけです。そうやって、そうこうしておりますと12時半ぐらいになりますから、今度はカフェテリアに行って食べる。もしくは教室で昼食を食べても構わないことになっています。まだ数百人ぐらいおりますので、何百人かおりますので、自閉症の子どもたちがそうやって集まりますと、カフェテリアも相当騒がしくなりますから、帰って教室でその子たちと食べるということをして、そういった場合には、食べる食事のスキルに関してはもっと近くで見てもよくなることになります。そして昼食後に、今度はグループの時間となります。ここでボードゲームとか、今度は普通クラスの子たちを招待して、例えばアートとかあるいはクッキングとか、こういう時間に普通科のクラスの子たちを招待したりして、一緒にやったりするわけです。そしてその後、短い休憩がありまして、その休憩時間中にはバスタオルやマットで休んだりしますが、その間にその子どもたちの帰る準備をしたり、あるいはペアレントジャーナルという形で親との連絡簿がありますので、そのペアレントジャーナルを書いたりします。そして一番最後には、1日の一番最後には、子どもたちは外に行き遊びます。そういう形でそのチームとしてその週、ほぼ同じようなことを繰り返すわけですが、しかし例えばその行き

先のセンターを変えたりして違うところに行ったりすることがあります。それでは次の質問のIEPにかかわる話に移りたいと思いますが、IEPは非常に役に立つものでありますし、また必要な法律上の契約として必要な必須なものでありますね。しかしこれはIEPというのは、子どもがきちんと必要なサービスを受けられるようにするためのものです。しかし先生にとりましては、そういうポイントなのではなくて、先生にとりましてはその子どもをどういう方向性に向かわせていくのかというガイドになる、指針になるものであります。また先生対親ということで、親の心配の親の懸念から、その問題をどうしても解決できない場合、長時間にわたって解決できない場合には、それは学校側の方で仲裁者を立てて、仲裁努力をいたします。私自身は18年間教えておりますが、そういったことは今まで一度もありませんでした。やはり先生が親たちと非常に緊密な協力関係を持つということが非常に重要だと思います。実際にIEPを本格的に書く前に、親と一緒に、今年はこの子どもにここまでできるようになってもらいたいという点を、十分に話し合っておくということがやはり重要だと思います。そういう形でIEPにその目標というものを記すことによって、そういうデータを持つことによって、それによってやはり子どもが非常に苦心しているとき、あるいは非常にうまくやっているときというものがあるんだと思います。またそういうものが書いてあることによって、例えばその子どもが例えば家庭にいて、例えばクリスマス休暇とかそういう形で家庭にいる際に、その子どもの能力が退行してしまったということもわかるわけですね。そういう退行のあったような場合には、場合によりましては、通常アメリカの場合1年間で10カ月学校に行くということになっているんですけども、学校に就学する期間の延長ということで、場合によってはさらにもう少し長く勉強してもらうということも、退行した場合には必要になってく

る場合もあります。アレキサンダーの話ですが、毎日数時間学校に参ります。毎年学校の新学期になりますと、新しい学年になりますと、私はその教室、そしてその先生と会って話をし、自閉症について話をします。したがって、その教室の中でどういう構造を使っていくのかということも、その先生自身によく理解してもらうように、前もって説明しております。アレキサンダー君でありますけれども、私の教室から通常学級に行くときには、メモ、すなわちノートブックを持って出ます。そしてそのノートの表紙には2年生の教室に行くようにということが書かれて、そしてスケジュールもそちらに書かれております。そしてそのアレキサンダー君がその教室にいる期間のワークシステムといったものがその教室に行くリストに書かれていて、それが手渡されます。ほかの教室の仲間と同じスキルを修得しようとしてします。そして、このワークシステムがリストになって渡されるわけですが、各活動、アクティビティーが終わると、彼はそこでチェックをして終了ということを記していきます。そして活動をすべて終了して、時間が来たらまた私の教室に戻ってきます。そして終了していないワークがあったとします。そういったものは、これはすべて残っている作業ということで、左のポケットに入れることになっております。私の教室に戻ってきたときの、もうこれはルーティンとなってるんですけども、その左のポケットに残っている作業があるかどうか、私にまず最初に見せることになっております。そしてその後、このワン・ツー・ワンのワークステーションがありますけれども、そこで1対1で終わっていない作業にとりかかって、そして終了させます。そして翌日その終了された作業というのは、これは終了したら右側のポケットに入れますので、それをまた翌日先生に見せることになっております。前期と比べて、アレキサンダー君でありますけれども、それほどIEPの範囲というのは広範なものではありませんでした。

というのも通常学級で、特に特殊学級のサポートなくしてできるものといったものは、IEPに含めなかったんです。さて、14歳のころの移行に関して述べさせていただきます。ちょうどこのころからIEPはシフトする、移行すると言います。すなわち学問的なところから、次に修了ということ考えた上でのIEPへと移行していくんです。もちろん学問的な作業というのは続けていくわけですが、将来仕事へという上では、こういった可能性が一番最適であるかということを考えながらIEPを移行させていきます。大体我々の学校制度のもとでは、3歳から22歳までが公立校の制度に入ることができます。大体16歳から17歳になりますと、一部は学校で過ごして、そして午後は職場で過ごす。すなわち先生に連れて行ってもらって職場で過ごすというような形態を通常とります。そして、なぜ教師になったのか、先生になったのかという御質問にお答えさせていただきます。さて、私が13歳から14歳のときだったんですけども、協会を通して情緒障害の人たちの入る州の施設で仕事を始めました。そこでの経験が非常に良かったということで、これは私の一生の事にしようと思ったんです。ミシガンで特殊教育の学校、そして学位を受けまして、そしてその後ノースカロライナに移りました。そして10年間、知的障害児を教えることができました。同じ学校で自閉症児向けのプログラムがある学校で教えることができたというのも、非常に幸運だったと思っております。そういった自閉症のプログラムの子どもたちというのは、そこでの特殊クラスに入っていたんですけども。そして通常のインクルージョンの方に、通常の学級に入る前に私のクラスを経るというプロセスをとりました。そして1976年当時というのは、自閉症児向けのクラスというのは1学級しかなかったんですけども、それが現在は36までふえております。そして10年間、ですから私は知的障害の子どもたちを教えてきたわけでありすけ

れども、その10年後にはそこで自給自足型の自閉症プログラムの方へと移りました。さて、私、ウェイク郡の人間でありますけれども、そのTEACCHプログラムに関しましては非常に長い経験を持っております。実際にこのシステムの中に入って楽しまなかったという子どもを見たことはありません。必ずしも口頭で伝えてくれない場合もあるんですけれども、しかしその構造を楽しんでいるようです。ショブラー博士にもアレキサンダー君については伝えたんです。すなわち彼の家に行って、そしてTEACCHモデルをそこで設定しました。アレキサンダー君ですけれども、ちょうど遊んで、外で遊んで帰ってきたときに、ワークタスクはすべてもうお部屋に並んでいる。こちらに、左にこのワークがあって、そしてまた机も全部セットアップされてるのを見て、彼はすぐに机に座って「やった！」と喜んでおりました。大体これでお答えしたと思います。あとですね、食事に関してなんですけれども、偏食についても申し上げたいんですが、でもこれは医師の観点ではなくて、先生という立場から言いたいんですけれども、それはなぜ同じものを食べるかというのは、頑固になって、いじじいになって食べているという場合もあります。ただ単純に変化は受け入れたくないというだけの場合もあります。ですから、その昼食のときにどういった構造化を我々は行っているかということ、お皿の上の一つだけ小さな固まりを乗っけると。ですから、まずこの一口を食べたら次に好きなものを食べられますよというふうに伝えます。そういった違うものを食べる、ないしは変化を受け入れるということが嫌だったわけでありまして、実際にその違ったものを食べると、楽しんで、喜んで食べているということがわかります。そうすると、今まで食べてこなかった違ったものをどんどん加えていくことができます。その手法でかなり成功をおさめてきております。

○司会（寺崎） ありがとうございます。それ

では有澤先生、先ほどの件なんですが、個別の指導計画を立てるときに、保護者との間で何かあったり、また立てるときの工夫等ございましたらちょっとお話しください。

○有澤 じゃあまず今の質問から。私の学級では保護者の方と1学期なら1学期の指導について、まず最初の段階で面接したときに、この学期、お宅のお子さんに対してうちの学級でどんなことを望みますかと。どんなことを身につけてもらいたいですかという要望を、なるべく具体的に聞くようにしています。我々が考えたその子に対するプログラムもお話をして、ある程度話し合いながら1学期間の目標を定めるというような方法で、個別の指導計画は立てています。日本における個別指導計画の現状というようにお話がありましたけれども、私、あえてこれからではないかなというふうに申し上げておきたいなというふうに思います。御承知のように新しい指導要領が公示されて、来年から移行期に入るわけですが、その中で盲聾養護学校の指導要領の中で、個別の指導計画を立てて教育を行うことが望ましいと初めて明文化されましたので、それを受けて、これから各地域、それぞれの学校で地域に合った独自の形で、いろいろな指導計画をつくれるのではないかなというふうに思います。実際にもう既にそういうものをつくって実践しているという話はたくさん聞いています。ある養護学校では、一人ひとりの子どもについて20枚ぐらい何か個別指導の計画を書くというのを聞いたことがあります。4月から書き始めて書くのが大変で、書き終わったころには夏休みになってしまって、すぐに2学期の目標を考えるというような話も聞いてますので。ぜひこれから使いやすい形、この2日間問題になっている連携を含めて、いろいろな意味でよりよい個別の指導計画のフォームというのを、いろいろなところで研究していただきたいなというふうに思います。それともう1点、TEACCHの考え方を日本に導入することの難しさみたいな

お話がありましたけれども、先ほど佐々木先生がおっしゃったように、私はまず TEACCH のシステムを全部を同じように日本でやるということは難しいと思っています。スタッフ的にもそういうものをそろえてということは、まず今の日本の教育のシステムでは難しいと思いますので、まず TEACCH の理念みたいなものを取り入れることから始めるというのが一番ではないかなというふうに思います。実際に学校の中で TEACCH の理念を取り入れられて、教材やいろんな構造化ということで、成功している例もいっぱいありますし、きょうフロアにいらっしゃる先生の中で、そういうことをもう既にたくさんやっていたりいらっしゃる方もいっぱいいると思います。それから学校だけではなくて、就学前のいろいろな通園施設や、卒業後の施設、先ほどお話にあったヒガシマ工房ですとか、東京でもそういう TEACCH の構造化を取り入れて成果を上げているという話をたくさん聞いています。私が日本で日本の文化に合って TEACCH を取り入れることの一番のポイントはですね、まず個に応じる、個性を尊重して個に応じる個別化ということ、どういうふうに受け入れるかとか、理解するかということが一つ大きなポイントだというふうに思っています。きのうもエッケンロード先生のお話の中で、いろんな部分でインディビュアライズと強調されましたけども、日本の文化というのはどうしても個が中心ではなくて、集団であるとかそういうところに適応するということを大きく考えますので、まず個に応じるということがどういうことなのかということを、文化の違いとしてとか、感覚的にわかるということが難しいんだらうというふうに思います。例えばですね、私の学級は通級ですから、一人ひとりの子どもに応じた指導を最初からやっています。お母さん方も自分の子に対して、最大限のことをやってくれというふうに要求しますが、個に応じたことをやっていくと、どうしても一人ひとりの障害の程度が違いますから、

こちらのケアの仕方といいますか、指導の仕方一人ひとり違って来るわけです。それは親に対しても一緒に、月1回の面接でお母さんを支えることができる人は月1回しかやらないのに、例えばもっと深刻な悩みを抱えているお母さんには2回も3回も面接をしたりしてます。それはもうまさに個に応じて対応してるわけなんですけど、必ずそういうことがあるとお母さん方というのは、あのお母さんは2回も面接してもらっているのに、何で私は1回なのというふうに、こういうふうになってくるわけですね。子どもの指導に対しても、例えば食事の問題で、給食をうちの学級で食べて帰る子もいれば、食べないで在籍の学級に帰って食べる子もいるわけです。そうすると、あの子は何で先生の学級で給食を食べるのに、私の子は食べさせてくれないのと言うわけですよ。どうしても日本の感覚で同じじゃないと不安になる。全く同じことをしてもらわないと差別されているような感覚を持つ。こういう感覚がまずインディビュアライズという考えを理解する妨げになっているんじゃないかなというふうに思います。これは親だけじゃなくて、我々教師もなかなか理解しにくい部門だらうと思います。どうしても一斉教育の中でやっていると、同じことをやらないと差別しているんじゃないかというような不安に陥ってしまいます。ですから、例えば1年生の子にはみんな同じ1年生の漢字ドリルと計算ドリルを与えて同じにやらせなきゃならないというふうに思うし、例えば自閉症の子で、まだまだそういうレベルではないのに、自分のクラスだから同じテストを与えてやらせなきゃ差別してるんじゃないかという感覚に教師もなってしまうという。そのあたりの考え方をまず切りかえて、個に応じるということが本当の意味でどういうことなのか、まずその意識改革をしなければ TEACCH の考えを取り入れていくところに難しさが残るんじゃないかなというふうに思います。あと、環境を変えると、渥美先生の話で、両方から近づくとというよう

な、子どもを育てることと、周りの大人とか周りの環境が自閉症の子どもに合わせていくという話がありましたけども、この辺も日本では非常に難しいところなんじゃないかなと思います。もちろんそれは自閉症に対する世の中の人々の理解をもっともっと促していくということになるんでしょうけれども、ある程度構造化された学校とか施設の中で、自閉症の子どもが安定して過ごせても、やっぱり一歩外にその建物から出ると、不安や混乱をもたらす情報というのはあふれかえていますので、それをみんな自閉症の子どもが理解しやすいように近づけるということは、日本の社会ではまだまだ難しいことで、我々教師はそれよりもやっぱり子どもがそれに適応できるだけの力を育てる方が早道じゃないかなというふうに思いますので、どうしても教師の考えは子どもを日本の社会に合わせて、そこに適応できるように変えなきゃいけないというふうにとらわれてしまいますので、それが個別化とか TEACCH の考えから外れて、過剰な訓練的なことになったり、パニックをもたらすような結果になっていくんじゃないかなというふうに思います。ちょっと時間がないと思いますので、あまり長くはしゃべりませんが、大体お答えになったでしょうか。

○司会(寺崎) どうもありがとうございました。ショブラー先生、今の有澤先生の考え、御意見を聞きながら、先生の方から何かございましたらお願いしたいと思います。それともう一つ、先ほどありました重度の子どもたち、全く視覚的な手がかりが理解できないというような子どもたち、こういう子どもたちにどういうふうにしていったらいいんだろうかということと、それとこの TEACCH はほかの障害の子どもたちにも利用できるのではなかろうかというような御意見が出ておりますので、そのあたりからもお話をお願いいたします。

○ショブラー いろいろな質問内容がありましたけれども、しかしやはりその中を中心として貫

ている一番の問題点は、やはりコミュニケーションということだと思いますね。すなわち重度の障害児におけるコミュニケーションの問題、あるいはいろいろなスペクトルにおいて、例えばパニックの状況におけるコミュニケーションということだと思います。今まで既にほかのスピーカーの方々が、自閉症の人たちに対するコミュニケーションの点についてはいろいろと触れられましたけれども、しかしやはり何といっても一番大きな問いかけは、質問は、非常にこれは複雑な問題なんですけれども、どうやって自閉症を持っている人たちに対して彼らを理解していけるか、あるいはどういうふうに対処していけばいいのか、教えていけるのかという話ですね。この点はこのような実際のミーティングの会合のおきましても、個人的に私に当てはまる話でありまして、すなわち皆さんは私の英語を聞かれる。しかしその理解は結局は通訳を介して、その通訳の話し方とか声の調子に大きく影響を受けながら私の話を理解しているわけです。したがってこのような会議において、たとえ非常に優れた優秀な通訳を使っていたとしても、何かもし万が一わからない、理解できない点があった場合には、ではなぜこうなのかというふうに考えてしまうわけですね。だから私が今、この場において日本語を理解できない、あるいは日本語を話すことができないという例えをですね、その例を自閉症と同じようなものであるというふうに考えて、それを例にして考えてみますと、シンプルに申し上げれば2点問題があるわけです。すなわち私は皆さんの言ったことを理解できない、理解しにくいという問題。それから私が話すことは皆さんがなかなか理解しにくいという問題。この二つがあるわけですね。私の方から不明確な不明瞭な、あるいは合意できないような意見、ちょっと一致できないような、そういった話をする中で、皆さんはそういう困難の中でパニックに陥ると。そういう中で選択肢はたくさん、いくつかあるわけです。まず1点目の選択肢と

しては、もう目を閉じてしまって何か別なことを考えるという選択肢。しかしそういう形であたかも集中しているかのように見せかける、あるいはメモをとると。しかし実際メモをとっているかのようなふりは、実は友人に手紙を書いているだけであって、ふりをしているわけですね。ですから対処方法としては、すなわちそういったときにどういふふうには振る舞うかに関しては、パニックの状況に対していろいろなやり方があるわけです。そういうやり方でも社会的には十分につじつまが合うような形で対応はしているわけですね。よくこの自閉症において問いかける、投げかけられる質問があるんですが、それはこういうことがあります。常に少し思い出すんですが、2カ国語教育に関してです。すなわち例えば日本やあるいはヨーロッパから、外国から私どもの学校に子どもが来た場合、そのような場合に果たして英語で教えるべきなのか、それとも母国語で教えるべきなのか、あるいは学校と家庭では違う言語にするべきなのか否かという、2カ国語の問題です。私は常にそれに対してこう思いました。すなわち自閉症児に対してそういった重度障害の子どもであっても、やはりメインの言語で、その1日の中で一番よく使われているその子どもにとっての言葉を使うのが適切であろうと考えたわけです。ところがですね、私はある非常に高機能な若い男性に会いまして、彼は英語もフランス語も両方とも習得して、両方ともうまく話せるようになったわけです。彼はアスペルガー症候群ということで、社会的な状況においてはいろいろな理解になかなか乏しかった、社会的な面においてはいろいろと難しい困難もあったわけです。すなわち、そういう2カ国語で教えられたことが、社会的な面においての問題の原因になっているのかどうかということを書いてみたわけです。彼の答えは、いや、そんなことは全然ありませんと。自分がその社会的な問題に直面すると、そうするとほかの人たちはすぐそれは2カ国語を話すからだと、2カ国語

の言葉の問題、外国語を話しているという言葉の問題なんだというふうに決めたがる。ですから彼の場合は、そういう社会的な困難さをカバーしていくためのものが、その2カ国語というものであったわけです。あるいはまた別の方向で考えてみれば、佐々木先生と非常に長い長年のおつき合いをさせていただいて、もう18年間一緒に会って、そしていろいろな仕事、研究をしてまいりましたが、その間、私の日本語で言うと、ほぼゼロのレベルからほんのちょっと、ほんの少しだけ上昇しただけです。しかし佐々木先生の側から言えば、英語は非常にいいわけです。完璧ではないかもしれないけれども、非常に彼の英語はすばらしい。だから常にお互いに、本当にお互いによく理解し合えたのかどうかなどは思うわけではあります。しかしむしろ佐々木先生たちはそのTEACCHに対して非常によく理解していらっしゃる。これは私どもが考えたり、あるいは知っていたり、あるいは説明したりすること以上に、場合においてはよく御存じなわけです。それはなぜかということ、単に言葉だけではなくて、佐々木先生が観察を通してよくそれを吸収していらっしゃるからです。すなわち、この場合は言葉という壁を乗り越えて、バイパスしてその観察という行動によって、非常に深い理解に達していらっしゃるわけですね。また彼の午前中の佐々木先生のTEACCHにかかわる話を伺っても、TEACCHに対して非常によく深く理解していらっしゃるなということがわかるわけです。先ほどの質問の内容に戻るわけですが、重度障害の子ども、そして特に視覚的なコミュニケーションが難しい、そういった障害を持つ子どもに対して、どういう形でコミュニケーションの壁を乗り越えられるのか。ということで、今までこの会の中で、ずっとコミュニケーションの難しさということが連続してあらわれてきております。しかし例えばじゃあこの場で私が水を飲みたいと。ところが水という日本語を、相当する日本語を知らないわけですね。

そうするとパニックの状況に陥りかねない。しかし多分これが水であろうから、私はこれに指を指すわけですね。ところがこれは水ではないかもしれない。何らかの商業である、パニックになってしまうかもしれませんが、そうすると、またさらに若干のパニックに、そんなに極度のパニックではありませんが若干のパニックになってしまうかもしれない。その次のレベルに行けば、私はもうこの水のボトルを持って掲げてだれかに示すわけですね、このボトルを。ですから、その写真を使うこともできる、あるいはそのもの自体を使うこともできる。あるいはその材料を使うこともできる。いろんなものを使うことは可能なわけです。ですから重度障害の子どもになれば、実際にやはり、より物を使うという傾向が強いと思います。すなわち水を飲みたいと思えば、実際のそのコップを、グラスを手に掲げて、そして水が欲しいということを示すわけです。先ほど渥美先生の方が、連携の重要さということをおっしゃられました。これはこの会議のテーマでもありませんけれども。やはりその連携が重要なのは、やはりそのコミュニケーションをする際において、両方の人たちが理解をしておく必要がある。すなわち言葉のかわりにこの子どもはこういうシンボル、記号を使う、あるいはほかの方法を使うんだという、その方法を知っておく必要があるわけです。だからこそ連携が必要なわけです。また有澤先生の話の中で、異文化の比較、そういう異なる文化を比較して考えていくというのは非常に困難が生じるという話が出てまいりました。しかしその連携という意味合いにおきまして、またコミュニケーションという意味合いにおきまして、このようにシステムが機能し得るわけですから、日本でもきっと必ずうまくいくと確信しております。コミュニケーションとして今申し上げましたように、たとえ重度障害の子どもであっても、そういったものを使って示していくことができる。例えばコートを使って外出していくということを示す

ことができるわけですね、外出するんだということ。あるいはボールを使ってプレイ、あるいはレクリエーションを示すということができる。したがってそういった形でものを、具体的なものを使うことによって、そういう方法によってコミュニケーションをとっていくことが可能である。そしてそれによってスケジュールを示すことも可能であるわけです。また質問の二つ目の要素として、パニックの状況、特に例えば重度障害の子どもにおいて、そのパニックが重度の場合において、どういふふうに対処するかという話が出てまいりました。この質問は日本のみならず、アメリカでも非常によく出る質問です。すなわち重度障害の子どもたちなどにおいて、そういう適応が非常に不適応な行動において、非常に困難な状況において、どういふふうに対処すればいいのかという質問ですね。マサチューセッツ州にあるんですが、そういう重度な自閉症の人たちだけを集めた施設がございます、ところがございます。ここでは例えば自分の肉を、自分の体の一部をかんで、あるいはそこを裂こうとしたり、あるいはもう話をすることもできない。もう対処することが非常に困難な、そういった重度障害の自閉症の人たちが住んでいる、レジデンシャルセンターがございます。最も重度な、重篤な自閉症の人たちが集まっているマサチューセッツのところですが。その学校のディレクターがハーバード大学の卒業で、恩師はドクタースキナーでした。ドクタースキナーは行動心理学で有名な、刺激反応による行動心理学で有名な先生ですね。すなわち行動習性型で、最も重度な障害を持つ人たちを集めて、1カ所に集めて、そしてその行動習性、行動学でとらえていこうということはこの大学は考えたわけです。そういった重度障害の、重度の障害を持つ人たちを集めたそういう行動管理においては、その考え方としては自害の行動をとる、すなわち自分をたたくとか、あるいは自分をかんでしまう。そういう自己破壊型の行動をとる人たちに対して、逆の行

動をとるという形で行動管理をしていこうと。こういった手法をとったかということ、電気ショックを与えたり、ないしは非常に強い匂い、アンモニアのような匂いをかがせる、ないしは非常に鋭い音を聞かせる、ノイズを聞かせるというような対処法をとったと。これが非常に重度の行動が出た場合に成功例をおさめていることを示しております。ただ、こういった逆をとるような行動ないしは対処によりまして、居住者の一人が、これは9年から10年ほど前なんですけれども、亡くなりました。ということで、このプログラムに参加するということ、マサチューセッツ州として停止することになったんです。そちらの学級にいた居住者、人々をノースカロライナに移行するに当たりまして、1人当たり年間15万ドルまでなら支払えるということで、州の方からノースカロライナにいる私の方に連絡がありました。私どもはそれを受け入れなかったんです。というのも我々はずね、最も重きを置いていたのが、そして最も努力をし、プログラムの時間をすべて割いていたのは、初期段階から対応していこうと。すなわちこのような対処法には最初から同意していなかった。参加していなかったわけでありまして。すなわち環境修正という手法を初期からとっておりまして。すなわちその教室の中での変化、そしてまた地域社会での変化を行っていこうと。これは特にコストがかからないわけでありまして。そしてその中で、環境の中での理解を深めていこうという手法をとってきました。こういった重度の行動を示していた人々でありますけれども、こういう人たちの出身元である環境というのは、そういった修正をするということには全く配慮されていないような環境から出てきた人ばかりでありました。御質問といったものは非常に短かったんですけども、延々と答えてしまったんですけども、重度障害の方でコミュニケーションの問題があり、そこからパニックが発生して、それにどう対処するかという御質問だったと思います。すなわちこの

コミュニケーションの問題というのは、どういったことがコミュニケーションされているか理解できない、またどうやって答えていいかわからない。そういったところからパニックに陥って発生するという問題であります。そして連携といったことも重要でありますし、初期段階からの構造化も重要であります。すなわち教育環境としても、保護者、学校、そしてまたクリニック、そしてディレクター、エージェンシー等でありましてけれども、そういったところ、そのような機関が一緒になってそういった教室環境をつくりだすということが、そういった重篤な問題を軽減するのに役立つと考えております。ですから御質問なさった方というのは、初期段階からもしですね、そういったコミュニケーションを促すような環境を持っていれば、かなりパニック状態に陥るといって、それも過度なパニック状態に陥るといって問題は避けられたのではないかと。たとえ知的障害があったとしても、たとえ言語能力に限界があったとしても、回避、ある程度はできたのではないかと思います。手短かにですね、有澤先生が文化の違いについて述べられましたので、それについて少しコメントさせていただきます。それは TEACCH を実践している者として、アメリカからこのように2人参りました。そのときに講演の中でも話をいたしましたし、また佐々木先生の方からもまとめがあったと思いますけれども。そういった文化の違いで導入が難しいのではないかとということに対しましても、ちょっとコメントさせていただきます。有澤先生がおっしゃったことを正しく理解していればということで確認をしたいんですけども、個別主義、個人主義という形で例えばですね、ほかとは違うことをしたら、またそこでえこひいきをしているのではないかとと思われる。すなわち月1回の面接の人と、月3回の面接がある人と、そして他人を自分と違う扱いを受けているとうらやむというような環境があるということをおっしゃったかと思っております。有澤先生、これを聞いたら驚

かれるかもしれません。アメリカも同じ状況です。例えばですね、私どもが自閉症児向けのプログラムを展開するその作業に入ったときに、ほかの発達障害児を持っている親御さんが、何で自閉症ばかりに着目するのだということで不平不満を言ったものであります。それができるまでというのは、自閉症児を持つ保護者の方々が、何で自閉症に対して十分な配慮がないのか、サービスがほかの知的障害に比べて関心のレベルが低いのかという苦情を言っていたのです。渥美先生がこの会議を企画するときに考えたことと、結局同じ結論になったわけでありまして。どういうことになったかということ、ここでノースカロライナの自閉症協会ということでの組織といったものがあつたんですけども、それが保護者の組織、グループとしてあつた。しかしそこでの嫉妬を避けるために、ほかの障害児を抱える御家族と連携するようになったわけでありまして。精神遅滞とかその他の発達障害児のグループと一緒にあって、最終的にどういった組織になったかということ、PPHCというペアレンツ・アンド・プロフェッショナルズ・オブ・ハンディキャップド・チルドレンという、この障害児を抱える親、そしてプロフェッショナルの組織といったものができ上がりました。これでもう、えこひいき、すなわちほかの人をうらやむというような問題は対処できたということになるんでしょうか。それでもやはり不満は残るわけでありまして。ですから答えはノーなんですけれども、しかし何らかの経路、それが管理できる経路ができ上がったと言えます。すなわち人間として連携し合って、そして助け合って何かを生み出しているという作業が、そしてその経路ができ上がったと言えます。私がなぜ日本を訪問するのを、これだけ楽しんでいるか、楽しみにしているかと申しますと、日本文化にこれは根づいているのではないかと思います。すなわち連携について日本に来るとより学ぶことができる。すなわち欧米社会にはない連携といったものが日本にはあるんで

はないかと思えます。これはもう人間の本来の問題であるとも言えます。文化によって、そのあらわれる形態は違うかもしれませんが、本質は同じだと思います。ちょっと話し過ぎましたので、ここら辺でやめたいと思えますけれども、これでお答えになっているのではないかなと思っております。別に文化の違いを軽視しているわけではありません。その文化に合った形で適応させていく必要があるかと思えます。ですから、その国ごとの調整は必要でしょう。でもこういったグローバルな連携もできるのではないかと思えます。というのも私も日本に来るたびにいろいろなことを学びます。そしてそれをまた交流という形で学んでアメリカに適用することもできるわけでありまして。文化の違いがあるからこそ、逆に新鮮に映るものもたくさんありますので、教えて、そして学ぶこともできるという、非常にいいトレードオフではないかなと思っております。この重度の障害の場合に、パニック状態に陥るその原因の95%は、コミュニケーションの問題によるものと考えられます。そういったコミュニケーションの問題というのは十分対処できる問題でありまして、その個人個人みんなが使える、理解できるところにコミュニケーションを調節、合わせればいいわけでありまして。

○司会（寺崎） ありがとうございます。ショブラー先生には最後にすばらしいまとめをしていただいたように思います。時間の関係で、フロアからと考えていたんですが、ショブラー先生、すばらしいまとめをしていただきましたので、これで終わりたいと思います。どうも先生方、ありがとうございました。（拍手）それでは御退席をお願いいたします。2日間にわたりましたプログラムはこれで終了いたしました。引き続き閉会式に移りますので、そのままお待ちください。では早速閉会式を始めます。主催者を代表いたしまして、国立特殊教育総合研究所総合企画調整官、阪内宏一がごあいさつを申し上げます。

○阪内総合企画調整官 2日間のセミナーに本当に御参加をいただきまして、ありがとうございます。私どもの特殊教育総合研究所というのは、特殊教育に関しましてさまざまな課題について総合的に研究している機関でございます。今回のセミナーの中では情緒障害研究部を中心に、自閉症児の教育の課題を今年度のテーマとして取り上げさせていただいたところでございます。今回のこの2日間のプログラムが、皆様方にとっていささかでもお役に立てば、私どもにとって大きな喜びでございます。このセミナーの中で私はショブラー教授が、ミラクル、奇跡は私たち自身だとおっしゃったことが非常に印象的でした。皆様方にとってはどんな思いで受けとめられましたことでしょうか。私たちは今後ともさまざまな課題に対して研究を中心に、研究所として

の活動を充実していきたいと考えているところでございます。どうぞ皆様方もお戻りになられまして、それぞれのお立場でそれぞれのお取り組みを充実していただければと思いますし、ますます充実したものになることを心からお祈りを申し上げます。本当に2日間、お疲れさまでございました。どうもありがとうございました。お気をつけてお帰りくださいませ。ありがとうございました。(拍手)

○司会(寺崎) どうもありがとうございました。これもちまして、国立特殊教育総合研究所主催による平成11年度特殊教育普及セミナーの全日程を終了いたします。皆様方の御協力と熱心な御参加に心から感謝申し上げます。どうもありがとうございました。(拍手)